

特集

学びに向かう 土台を築く 学級づくり

少子化に伴う集団活動の減少により、
うまく人間関係が築けない子どもが増えたという声を聞く。
また、学級経営の経験が浅い若手の先生の育成や、
多様な価値観を持つ保護者への対応も学校全体の課題であろう。
今号では、子どもたちがつながり、学びに向かう環境となる学級を
どのようにつくっていくかを考えていきたい。

学級づくりに関する課題として挙げられた声

- 学級の問題を自分たちで解決しようとする意欲が低い
- 自分を認めてほしいという欲求は高いが、友だち（他者）を認めようとする気持ちが低い
- 話し合い活動が出来ない。他人との意見をすりあわせ、合意点を見付ける経験が必要
- 子どもと保護者の価値観が多様化する中での1つの学級づくりが難しい
- 若手教師が学級づくりの楽しい経験を十分持っていないため、どうしたら学級がまとまるかが分からず困っている

*「VIEW21」小学版読者モニターアンケート（2014年2～3月実施）より一部を掲載

データから見る学級づくりの重要性

先生と子ども、子ども同士が信頼関係で結ばれ、学級が安心できる居場所であることは、学習に取り組む環境を整えるという点でも重要であろう。その重要性を、ベネッセ教育総合研究所がこれまでに実施した調査データを基に改めて示した。

図1 子どもの友だちへの意識／小学4～6年生

● 友だちにより気を使う傾向に。性別による差は小さくなった

	小学生全体		男子		女子	
	2004年 (4240人)	2009年 (3561人)	2004年 (2172人)	2009年 (1814人)	2004年 (2062人)	2009年 (1745人)
友だちといつも一緒にいたい	81.8	85.3	77.9 <	82.9	86.1	87.9
違う意見をもった人とも仲よくなる	70.1	74.9	68.4 <	75.2	72.0	74.7
友だちが悪いことをしたときに注意する	60.0 <	65.3	57.6	62.2	62.4 <	68.5
年齢や性別の違う人と話をするのが楽しい	53.2	54.5	47.2	49.8	59.6	59.6
グループの仲間同士で固まっていたい	46.2 <	52.5	47.4 <	56.7	45.0	48.3
仲間はずれにされないように話を合わせる	46.7	51.6	44.6 <	50.4	49.0	52.9
友だちと話が合わないとき不安を感じる	46.9	47.0	42.2	44.5	51.9	49.4
友だちとのやりとりで傷つくことが多い	—	27.1	—	25.7	—	28.8

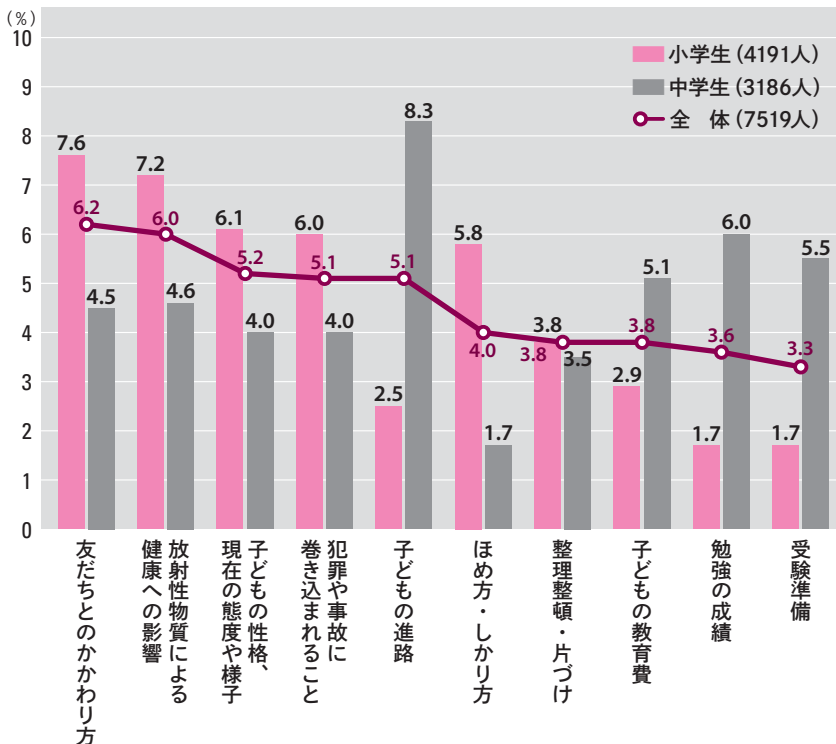
注1) 「とてもそう」 + 「まあそう」の%

注2) <>は5ポイント以上差があることを示す

出典／ベネッセ教育総合研究所「第2回子ども生活実態基本調査報告書」(2009)

図2 保護者が子育てにおいて1番気がかりなこと／学校段階別

● 小学生の保護者にとって子育ての最大の気がかりは、友だちとのかかわり方



注1) 38項目中から1つ選択。全体値の上位10項目を図示した

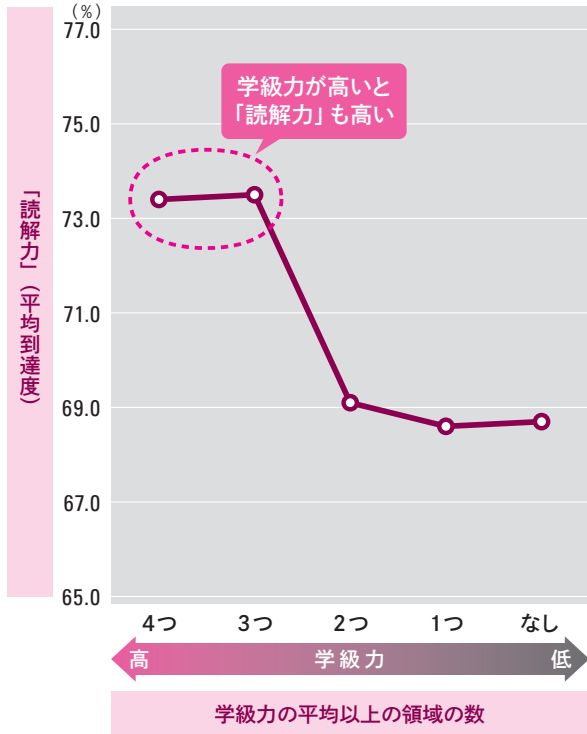
注2) ()内はサンプル数

出典／ベネッセ教育総合研究所「第4回子育て生活基本調査(小中版)」(2011)

学びに向かう土台を築く学級づくり

図4 総合学級力と「読解力」の関係

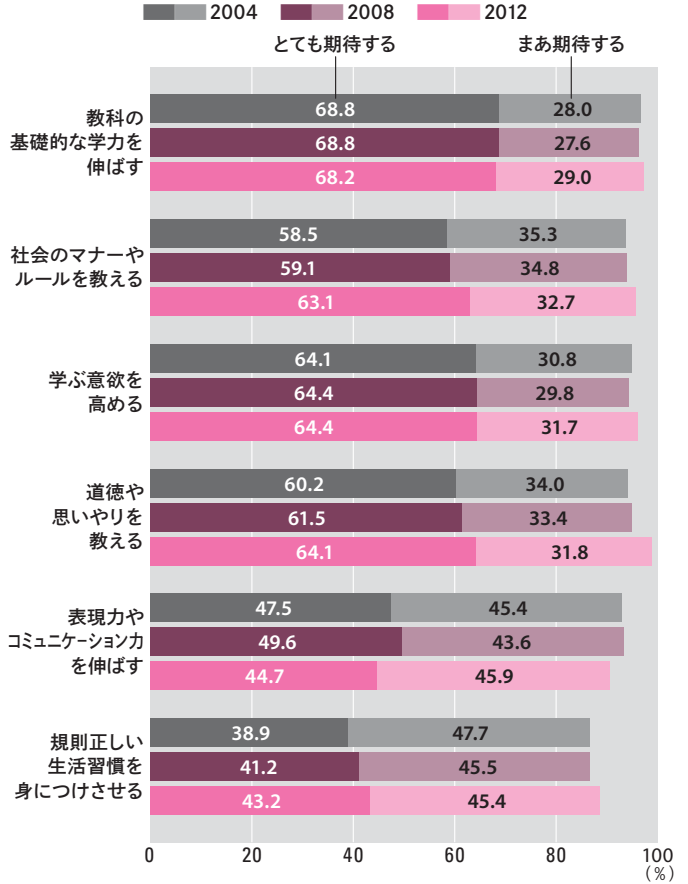
●学級力が高いと「読解力」も高い



注1) 横軸は、総合学級力の4つの領域(目標達成力、創造的対話力、協調維持力、規律遵守力)の平均値を求めたとき、全体平均値以上であった領域の個数を示している
 出典/ベネッセ教育総合研究所「『読解力』を育てる総合教育力の向上に向けて—学力向上のための基本調査 2006」

図3 学校に期待する教育/小学2年生と5年生の保護者

●正しい生活習慣や社会のマナーなどの定着も期待する保護者



注1) 全22項目のうち2004～2012年の経年比較が可能で、2012年の「とても」と「まあ」の合計の数値が高い6項目を示している
 出典/ベネッセ教育総合研究所・朝日新聞社共同調査「学校教育に対する保護者の意識調査 2012」

編集部から

「友だちともっとうまくかかわれたらいいのに」——うまく思いを伝えられずに、友だちと衝突したり元気をなくしたりする子どもが増えていると、気に掛けている先生の声です。調査データを見ると、子どもは友だちと一緒にいたいと思う一方で、仲間はずれにされないよう話を合わせる傾向が強まり(図1)、保護者も子育ての最大の気がかりに「友だちのかかわり」を挙げています(図2)。また、地域によっては若手教師が増え、保護者の多様な期待(図3)を前に、学級経営に不安を抱く管理職の声もありました。全教科を担当の先生が1人で教えることが多い小学校では、全人格的な教育が出来る一方で、学級経営は担任の先生の資質に委ねられ、学校全体で取り組むのが難しいのかもしれない。取材で拝見した授業では、1人の子の発言を一生懸命に聞く姿やグループ活動で自分の意見を話したくて前のめりになる子の姿がありました。そして、そのような学級に共通するのは、安心して発言できる風土なのだと感じました。データでも、学級力の高さと読解力との相関が示されています(図4)。今回の事例では、子どもが力を合わせて取り組む活動や学級の雰囲気を目に見えるようにすることで、皆が同じ方向に向かって学級をよりよくしていく取り組みをご紹介します。これからの学級づくりのヒントにしたいだければ幸いです。

「VIEW21」小学版編集長 杉田美穂